半導体漫遊記 (240)

湯之上隆

バーチャル開催のVLSIシンポ
情報の洪水、夢か悪夢か

当初、ハワイで開催される予定だったVLSIシンポジウム2020が6月15日～19日、オンデマンドとライブの混成によるバーチャル方式で行われた。

VLSIシンポジウムの特徴は、半導体デバイス・プロセスの「テクノロジー・シンポジウム」と、回路の「サーキット・シンポジウム」が同時に開催されることにある。これら以外にも、その時代のトピックスを集めた「ショートコース」や「ワークショップ」、テクノロジーとサーキットの「ジョイント・フォーカス・セッション」や「ジョイント・パネル」、最終日の「フライデー・フォーラム」などが行われる。

今回は53セッションがオンデマンドで視聴でき、基調講演となるプレナリーやQ&Aなど40のセッションがライブ形式で行われた。

そして注目すべきは、予稿集はもちろんのこと、ほぼ全ての発表スライドがPDFで配布されたことである。通常、ショートコースでは発表スライドが配布される。しかし、本会議の発表スライドが配布されることは、まずないと言っていい。

そのため筆者はこれまでの国際学会で、どうしてもその発表スライドが欲しいとき、個人的に発表者に「あなたの発表を記事に取り上げたいからスライドをいただけないか?」と頼みに行った。そして1回の国際学会で発表スライドをもらえるのは、せいぜい5件程度だった。

ところが、バーチャル学会となったVLSI2020では、ほぼ全ての発表スライドが配布されたのである。「これは、夢ではないのか?」と思ったほどだ。

しかしその一方、その発表スライドは259件もあった。1件あたり、30～50枚のスライドで構成されている。オンデマンドでの発表時間はショートコースが1件50分、本会議などが1件20～25分であり、259件全てをとても1人で視聴することはできない。そのため「これは悪夢だ!」とも思った。

そして学会の開始とともに、オンデマンドやライブ・セッションが始まることを知らせる「リマインダー」メールが69件も届き、さらにライブ・セッションが終わったことを告げる「Sorry(ごめんね)」というメールが40通も届いた。その他のお知らせの7件を含めると、5日間に116件のメールが雨あられと送り付けられたわけである。

今回の参加者は、ショートコースが686人、本会議が1021人と過去最高を記録した。これらの参加者が全て、筆者と同様にマシンガンのように送られてくるメールに驚き、259件の発表スライドという情報の洪水に溺れたと思われる(少なくとも筆者はそうだった)。

このVLSI2020では、2nmや1nmプロセスが示された微細加工のロードマップ、5nm以降に量産適用されるようになったEUV露光装置、ロジックやメモリなどを積層して1チップ化する3次元ICなどに注目した。しかし、情報の洪水に溺れている筆者には、今はまだ、それを整理することができていない。次回以降の半導体漫遊記でお伝えしたい。

(微細加工研究所・所長)

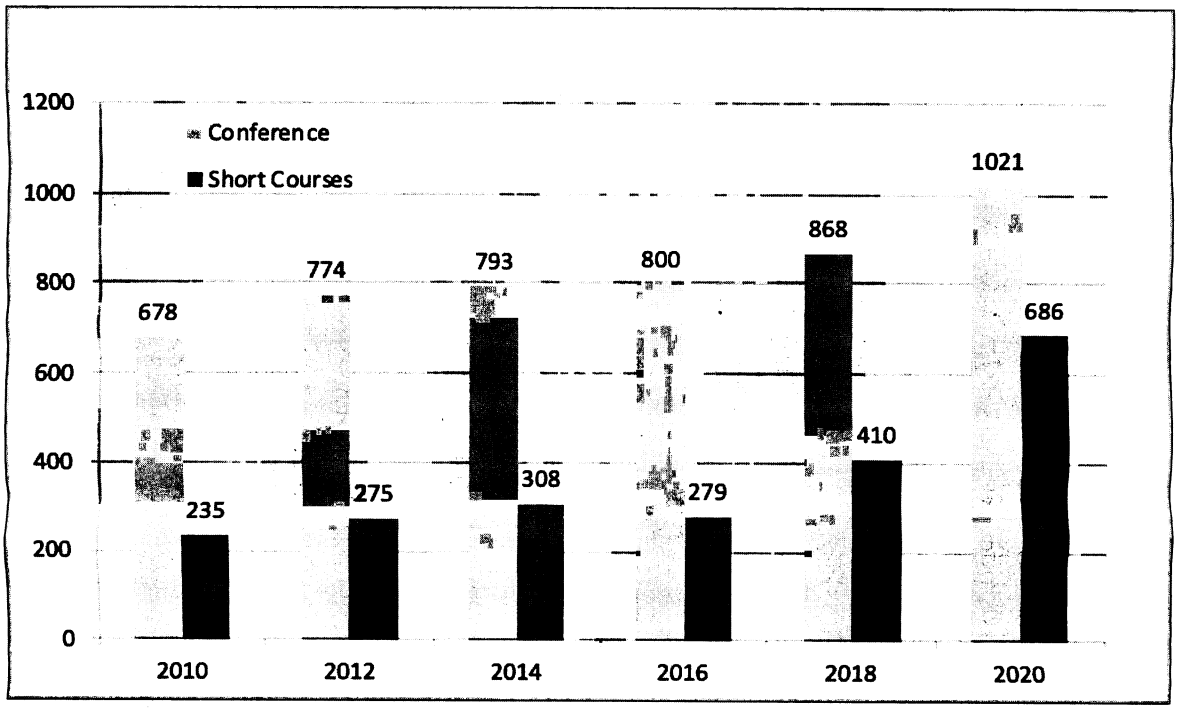

図1　VLSIシンポジウムの参加者数の推移

出所:VLSIシンポジウムの記者会見の資料より抜粋